

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり

第1回 地域づくり部会

議事要旨

あいさつ

出雲河川事務所 西副所長 「斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」を、昨年10月に宍道湖・中海圏域に拡大した形で本格的にスタートさせた。本日は協議会に基づく二つの部会の一つである、地域づくりについての第1回目の部会となる。大型水鳥を通じて、この地域が持つ発展の可能性を具体化するために色々な意見を頂き、今後の取り組みにつなげていきたい。

出席者紹介

部会長、副部会長の選出

議事

(1) 生態系ネットワークの概要と取組経緯について

「資料1：生態系ネットワークの概要と取組経緯について」の説明

委員 本部会での具体的な成果をどのように定量的に把握していくのか、現時点での考えを知りたい。

事務局 本部会の成果として、1点目は生息環境を保全すること、2点目はそれを踏まえて地域の活性化を促していくことを考えている。例えば、地域の特産品として特産米ができたり、観光客数が増加したりということである。定量的な成果は難しいかもしれないが、事業を具体化していくための提案をいただきたい。

(2) 大型水鳥類の生息環境整備に基づく「地域振興展開方針（案）」等について

「資料2：「大型水鳥類の生息環境整備に基づく「地域振興展開方針（案）」等について」の説明

部会長 資料1、資料2では、検討協議会の流れのなかで本部会が進んでいることを示した重要な資料であり、それらを理解していただき、議事を進める。

(3) 中海・宍道湖圏域における大型水鳥類を通じた「観光」および「農業」の取組事例と今後の展開について

「資料3：「中海・宍道湖圏域における大型水鳥類を通じた「観光」および「農業」の取

組事例と今後の展開について」の説明

委員 1月28日に「斐伊川水系と大型水鳥類の魅力を知り、伝えてもらうためのモニターツアー」を開催した。主な参加者は観光関係者で総計40名であった。早朝に宍道湖の湖心から斐伊川上流へ向かうマガン約2000羽の姿を観察する「オプションツアー」と、実際の商品化を目指すための「モニターツアー」を開催した。大型水鳥類が新たな観光資源となり得ると確信したが、朝早い時間には道の駅も閉まっているなど、来訪者を迎え入れる体制には課題があり、努力が必要と考える。

観光全体では、冬季の来訪者数が12月から2月までは大変厳しい状況を迎える。出雲大社の遷宮のお蔭で、出雲大社周辺の入込客数を年間600万人確保できていたが、遷宮終了後も同様の来訪数を維持するためには、戦略を立ててしっかりと取り組んでいく必要があると考える。

委員 農事組合法人ファーム宇賀荘では、島根県のエコファーマー認証を受けて、環境負担軽減に寄与する農法の実践を進め、環境に優しい農業生産を行っている。水田には約1,500羽のハクチョウが飛来する。平成15年からは、有機無農薬栽培を始め、ドジョウが生息できる環境を創出するといった趣旨で「どじょう米」の生産を始めた。「どじょう米」の圃場は、冬季湛水、深水管理による多様な生態系の確保、保全に取り組んでいるが、無農薬ということもあり除草対策が課題として挙げられる。また、取引先から有機JAS認証取得の要請があり、こちらの認証取得も課題となっている。

能義平野で別の法人が最近、秋の耕起や冬水湛水を始めたが、それによって逆に餌場が少なくなって、鳥が少なくなったという状況も出ている。宿となる場所とそうでない場所が必要で、そういった意味で横の連携も必要。

委員 農事組合法人ゆとりの里下古志ファーム13では、設立当初から農薬や化学肥料を減らした栽培方法で自社ブランドの「はくちょう舞」を生産し、平成23年からは除草剤を含む一切の農薬と化学肥料の散布を行わない栽培方法で「湖北はくちょう米」をブランド米として立ち上げた。水田には、約300羽のハクチョウが飛来する。自然と共存する農法が評価され、口コミ等で人気が広がり、平成27年度よりANAの機内食や空港のラウンジの商品として扱われるようになった。

経済効果として、JAで出荷するコシヒカリの一等米でも30キロで5,500円から5,600円、1キロあたりでは183円のところ、有機栽培米の「湖北はくちょう米」は1キロ670円くらいで販売している。

今後の展望としては、インターネット販売の拡大と、有機栽培米の作付面積を今年は3.3haから4.0haへ拡大する予定である。

委員 特定非営利活動法人未来守りネットワークでは、中海に大量に発生した海藻を資源とした堆肥を用い「海藻米」を栽培し、中海の水質改善とこれを通じた農村再生等を目指している。海藻を資源とした堆肥「海藻米」を栽培した結果、両生類や小魚が非常に増えて、それらを啄むシラサギの大群が稲を踏んで困る、といった環境面で良いこともある反面、農業被害も出ているようである。

次年度には奥出雲でも 11 h a を展開すべく打合せ中である。

また、海藻を資源とした堆肥を用いた野菜や果物も栽培されていて、収穫物の栄養素や品質は慣行栽培と変わらない、もしくは良好であるとされている。課題としては、JA との協力体制が十分でない点が挙げられる。山川海の繋がりを大事にしながら、地域の発展に努めるべきで、全国的にも中海にしかない「オゴノリ」を使ってブランドを作っていく。

海藻は増えすぎると腐って水質悪化を招く、取組を進めることで、宝物になることを全国に発信していきたい。

委員 観光ツアーについては、既にツアー会社が動き出していると発表の中であったが、今後その部分との関係性の整理も必要。

農業は、有機無農薬栽培下において、使用している有機肥料の内容と土壌に与える影響や、有機肥料の入手先、米の収穫量の年次変動について伺いたい。海藻米の商品化にあたっては、境港市の給食のお米に選定されていると聞いている。

個々の取組は素晴らしく、それぞれの地域やバックグラウンドが異なる中で、共通した取組を提案するのか、それとも共通のアイテムを使って各々の取組を発展させていくのか、について議論が必要である。

部会長 地域毎なのか、もしくは圏域全体で取り組むのか。また圏域全体で取り組む場合は共通のバックグラウンドが必要になるため、十分な検討が必要である。

委員 観光の概念でいうと今までは地域間競争があったが、現在は広域の観光協会が立ち上がり、広域でやっていこうというスタンスとなってきた。今回も大型水鳥たちがとりもつ縁を結んで、連携して一つの商品にしていけることが、我々に求められていること。

委員 農業に関しては、行政、県、市、JA、生産者の連携が乏しく、特に中国地方が一番遅れていると感じており、関連団体や流域一帯という単位で連携することが大事と考える。また、ハクチョウの糞は肥料になるが、人の影響により水田内でも飛来するハクチョウ数が異なり、土壌の栄養状態にムラが生じている。そのため、農業にとっては良いことだけではない。能義平野では統一したエコ大豆を作ろうという動きがある。

委員 農業に関しては、兵庫県のように県を挙げて取り組んでほしい。我々としては付加価値の高い米を生産したい。ハクチョウが多数飛来することで、困っていることは特にな

い。
遠方から来る方は、無農薬というだけで高くても買って帰る人もいるが、地元では値段が高いと関心が低い。

部会長 観光と農業の切り口で進めていく上で、地域が暖かく迎えたり、関心をもったりという理解が必要。

委員 安全・安心をうたい文句にすれば消費者は理解してくれる。観光客は食への関心が高いと感じており、米や川魚など様々な魅力的な食材があり、活用できると感じている。大型水鳥類だけでなく、絶滅危惧種など様々な生きものを核として農業を発展させ、それと合わせた観光が必要と考える。

委員 ドジョウの養殖も行っているが、東京や金沢からの需要があり各方面に出荷している。また、出雲市で飼育しているトキのエサとしても提供している。同様に、米についても販売戦略や PR 方法の検討が必要である。

委員 冬場の観光資源においては、新しい発見を得たと感じる。観光振興を図るには、観察ポイントなのに屋根もないところでは、何らかの設備が必要であり、お金をかけていく部分もある。農業振興では、広域での統一ブランドをつくるのか、それとも個々の取組をより向上するために支援するのか、などの課題がある。今後の方向性としては、観光面では冬場の観光資源の展開方法、農業面では連携やブランディングなどの課題が見えてきた。課題や方向性は明確なので、どのように解決していくかの具体的な検討が必要である。

委員 折角のご縁なので、地域全体で取組むべき。それぞれの地域での役割分担・地域分担があると良い。本部会で、中海・宍道湖圏域で、農業振興を優先的に進め観光振興にあたっては農業者と調整しつつ進めるエリア、バードウォッチングを推奨するエリアを指定して、将来的にはマップを作成できれば良いと思う。

部会長 大型水鳥類の生息環境について、「生息環境づくり部会」との関係性はどのように考えているのか。

事務局 例えば、大型水鳥類が重点的に飛来するとツアーが組みやすくなるなど地域づくりのために必要な、大型水鳥類の生息環境に関する希望を、「生息環境づくり部会」に挙げていただき何ができるのかを考えてもらうなど、両部会でキャッチボールしながら実現化

していきたい。

部会長 地元や農業者を盛り上げるためにも、来訪者に喜んでもらうためには何をすべきかが課題。外国からのインバウンドに対する受入の仕組みも課題になってくる。地域の理解を得ながら、情報の発信を大いにしていくことも必要。関係機関と連携し、地域全体で営業していくことも課題。来シーズンにつなげるために大型水鳥類の観察会の企画、農業・漁業・加工品も含めて環境配慮された特産品のブランド化や農家の方の取組を後押しするようなことができれば良いと思う。

委員 農業・観光の両面において、「食」との結びつきは非常に大事な考え方である。

部会長 「山陰いいものマルシェ」は中海・宍道湖圏域を中心とした生産者の方が出店しているので、本部会として出展したり、出店者に素材を提供したり、加工品を作成してもらうというのはどうか。

委員 地元住民を対象にした大型鳥類に関するモニターツアーを実施する価値はあると思うので、本部会として行えるようであれば、検討したい。

委員 ハクチョウを見学するために、広島から観光バスで来る人もいる。今までは呼び掛けはしていないが、今後は積極的に呼び込むこともしていけないといけない。

部会長 「地域づくり部会」として、野鳥の観察できるエリアを「生息環境づくり部会」と調整しつつ、生産者や地域の方のご理解を得ながら、PR していくことが必要と思う。

その他

事務局 本日の部会で出た課題や提案は、事務局で整理して、2月22日に開催予定の第3回協議会で報告する。

閉会

事務局 次回の「地域づくり部会」の開催については、各委員と調整しながら進める。